

「か確認しながら見て回りました。何年か前の雪の重みで少し曲がってしまっている木もありますが、さほど問題もなさそうです。同じ場所、そして同じ環境で育つたのに木の育ち方が様々でした。」

我が子も同じ環境で育てたのに性格はそれぞれ違い、なぜだろうと思う時もあります。これがその子の個性なのだろうと思いましたが、

またその近くに沢が流れていて、当時まだ小さかった子供たちは沢でサワガニ取りをして遊んでいた事を思い出しました。

小さい頃の思い出は本当に宝だと思います。小さい頃を思い出すだけで子供達に「大きくなってくれてありがとう」と感謝の気持ちが湧いてきます。

義父も年を重ね、山歩きもだんだん難しくなってきました。私たちと一緒に喜んで行きたいと言ってくれたので、これから一緒に山歩きをしたいと思います。

忘れていた親孝行週間 高安 実

昨年の親孝行週間は九月十九日から二十三日のシルバーウィークで行なうことになっていましたが、完全に忘れていて、気づいたのが二十三日の夜でした。息子に背中の上に載ってもらいマッサージをしてもらっている最中、「あつ、やべー、親孝行週間忘れてたー」と、声を出して気づきました。その時点で午後八時過ぎ、何もすることが出来ず、実家に電話しました。

私「親父、去年もあつたかと思うんだけど、会社で親孝行をするっていうイベント。」

父「あー、そんなことあったなー。」

私「その親孝行週間が十九日から二十三日なのすっかり忘れてて、今電話した。」

父「シルバーウィーク最終日のこんな時間に電話されても……。」

私「確かに……。」

私「二十七日の夜は、親父とおぶくろ暇？」

父「お母さんに電話代わる。」

母「はい。別に予定入ってないよ、大丈夫。」

私「じゃあ、みんなでご飯でもどうですか？去年と一緒だけど。」



親孝行作文 2015

IFPでは毎年、「親孝行週間」を設け、普段出来ない親孝行、またはそれぞれが考える親孝行を実践しております。これを読んで頂いている皆様の「親孝行」のきっかけになって頂ければと思います。



IFP

INDEPENDENT FINANCIAL PLANNERS

株式会社 IFP

〒310-0066 茨城県水戸市金町3-4-30 101
Tel.029-291-4021 Fax.029-291-4022
E-mail.info@ibaraki-fp.com
URL.http://www.ifp-mito.com

母「はーい。」

結局、一昨年同様、家族みんなで楽しく食事会をしたのでした。実際、休みの日はボランティア活動などで時間がないので、来年は早いうちに、両親へ手紙でも書くことと決めました。

親孝行週間 三次 一葉

シルバーウィークだったので、稲刈りの手伝いに行きました。曇りで時々小雨も降る中の稲刈りでした。

父がコンバインで稲を刈って行くので、主人は軽トラで刈ったもみを乾燥するために、精米所に運びました。

私は、手伝いは何をしたらかというところ……お茶入れ・お昼の準備や家の雑用、あと寄せ刈りをして貰う母との話し相手で、大した手伝いは出来ませんでした。

でも、最近忙しくゆっくりに母と話すことが出来なかったことで、子供の事や日常生活の事など話せて、お互いリフレッシュすることが出来ました。

普段当たり前前に食べているお米も、春の種まきから始まり、秋の収穫するまで両親が大変な思いをして作っていると思うと、感謝の気持ちしかありません。

今回の親孝行は、稲刈りの手伝いと稲刈りで疲れた両親に近くの温泉に入って美味しいご飯を食べてきてと、お金を渡すことくらいしか出来ませんでした。

でも、一番喜んだのは、新米を食べた孫からの「おじいちゃん、新米美味しかったです。ありがとうございますの電話だったよ。」です。

今年は、子供達も部活等で手伝いに行けませんでした。来年は家族みんなで手伝いに行き、少しでも両親の負担を少なく出来ればと思います。

母と一緒に書いた「幸せノート」 宮田 久雄

今回の親孝行週間はシルバーウィーク。

「さて、何をしようか？あつ、そうだ。幸せノートを書くこと」と思い、実行しました。

「幸せノート」とは……自分の生きざまを書き残す、大切な人へのメッセージを書き残す(24ページの「エンディングノート」のこと)。

今、水戸市との協働事業で、「幸せノート塾」を開催中。(水戸市民の)受講生に書き方を指導しています。

受講生は、今までの自分の人生を振り返り……涙。父母、祖父母との思い出を書いて……涙。大切な人へのメッセージを記入して……涙。

以前から、自分の母に書いてもらいたいと思っていましたが、きっかけがなく、まだ書いてもらっていませんでした。

「この機会に一緒に書いてみよう」ということで、2人っきりになった夜、食事しながら質問しました。

私「婆ちゃん(母)が小学校に入るまでで、一番嬉しかったことってなに？」

母「水戸の叔父さんに、下駄と服を買ってもらったのがすごく嬉しかったんだ。とても優しい叔父さんで、いろいろ買ってくれたんだ。」

私「お父さんお母さん、お爺さんお婆さんとの思い出で一番頭に浮かぶの何？」

母「お爺さんは、トク農家と言って、優秀な農家だったんだ。いろいろな人が視察に来たんだよ。農業をやりやすくする道具を自分で開発して、それを使って優秀な農家になったんだ。凄かったんだよ。お婆さんは、母ちゃん(嫁)をととても大事にしていたな……。とても面倒見のいいお婆さんだったよ。」

こんな会話が約一時間。今まで聞いたことがなかったことが、母の口からたくさん出てきました。

私「まだ書いてないところを、毎朝一冊でもいいから書いていくとポケ防止になると思うよ。」

母「わかったよー。」

「生きがいのしちに聞かないとわからないよ」としてたくやんめります。